

図書館講座「石狩市民図書館ストーリー」

5月17日(土) 14時~16時

【第1章】 いま、私たちの希望はどこにあるか - 今日を、明日へ

講師 菅原 峻 氏 (図書館計画施設研究所長)

びっくりしたんです。

何でびっくりしたかという、この図書館が石狩市図書館でもない、石狩市立図書館でもない、石狩市民図書館という案内があったので、びっくりしたんです。えっ、どうして市民図書館という名前を易々とつけちゃったんの言うのが私の気持ちです。

もう14年になりますけれども、佐賀県の伊万里に図書館が生まれて、伊万里も伊万里市民図書館と呼びました。伊万里にはこと同じように、市民が図書館を手にした、そう願って長く運動を続けてこられた。私は、その運動の時代から伊万里に関わって、市の図書館基本計画作り、そして建設、開館とずっと関わって、その伊万里市民図書館が今、開館して14年目に入って、ご縁はずっと続いております。

石狩市民図書も、石狩市に図書館が欲しいという住民の願い、そういう運動、今石狩にはいませんけれども、ご存知の方もおられるでしょう、宮本ナオコさん、イカリシオリさん、そういう方たちの時代から石狩におじゃましたりしていました。

それで、いよいよ石狩に図書館をとということになって、たまたま、函館に講演に行ったところ、そこで準備されていた石沢さんが見えていて、今度、石狩で図書館の計画作りをしなくてはいけないので手伝ってほしいという話でした。ご縁ができて計画を作るといっても、一人で作ったんじゃなくて市民も加わった。当時は町民でしたね。町民も市民も区別しちやいけませんけれども、協議会だと思いましたが、そこでご相談しながら計画を作り、そして設計者が選ばれ、建設が進んでこの図書館が誕生した。

そこに配っていただきましたとおり、2つの市民図書館、伊万里市民図書館は、1995年の7月なのか、平成7年の7月なのか、777(スリーセブン)というんですけれども、開館しました。

図書館設置条例の中にこう謳ったのです。伊万里市は、全ての市民の知的理由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展を促すため、自由で公平な資料の情報を提供をする生涯学習の拠点として、伊万里市民図書館を設置する。

今まで、図書館の設置条例は山ほどありましたけど、このように、明確に図書館の目的を、しかも格調高く宣言したのは、伊万里が初めてです。それから5年経って、石狩市民図書館の誕生になるんです。

石狩市も、本市は、利用者が図書館資料を自由に選択できるよう、その公平な提供を行い、全ての市民の図書館資料に対する要求を答えることにより、市民の生涯にわたる事項、

学習を保障し、もって文化のかおり高いまちづくりに起用する目的として、石狩市民図書館を設置する。そういう条例を作りました。私は、この条例で、石狩市は本市は、と言っていますけれども、これは、石狩でいうと「石狩市民」ということなんです、本市は、というのは、何も役所が本市じゃない。石狩市民は石狩市民図書館を設置すると宣言しているのです。

伊万里でいうと、伊万里市民は、こういう目的で伊万里市民図書館を設置すると宣言したんです。図書館の誕生、その図書館のこれからの歩み、それをしっかりと市民に約束する。将来の市民に向かって強い約束ごとを交わす。これが設置条例なんです。伊万里の場合は、この設置条例の第1条を、館長さんは名刺に刷り込んでいます。

石狩も、設置条例にある図書館の目的を、名刺とはいかなくても図書館の一番ポイントになる場所にしっかり掲げる位のことをしてほしいと思うんです。このことが、私達と市民との関係をしっかり将来に向かって宣言する、将来に向かって約束していく、そういう大事さを理解してほしいと思うんです。

石狩に市民図書館が誕生した時、私は、こう考えました。西の伊万里市民図書館、北の石狩市民図書館、この2つの図書館が兄弟・姉妹の関係でお互いに学び合い、刺激し合い、成長しあう関係を作ることができないだろうか。私は、両方知っているから、ひょっとして口を利くことも可能かなと思ったのですが、星の声が聞こえてきた。そんなに慌てることないよ、と。もう少し時間をかけて考えたら良いんじゃないのと、そう言ってくれました。私も、じゃあ様子を見ましようね、と。その上でこの2つの市民図書館が将来どうなるか。お互いに励ましあい、学びあうような関係になっていくかな、なったらいいな。その時には、私も声を上げようと思っていました。しかし、そんな事をしなくて良かった。こんなことを皆さんの前で言うのは残念です。涙が出るくらい残念なんです。この石狩市民図書館には、2つ不思議な事があるんです。何か、この図書館のどこかに悪いものが住んでいるんじゃないだろうか。或いは、この図書館を建てたこの土地は、図書館を建てちゃいけない土地だったのじゃないかと、そんな考え、話してはいけないことが、私の胸に沸いてくるのです。今日、渡邊館長さんに初めてお会いして、少しおしゃべりをしました。

石狩市民図書館が出来てから、生まれたのが2000年ですから、9年の間に館長さんが8人も代わっているんですよ。これって一体どういうこと。図書館は、これだけ高い、素晴らしい目標を掲げて、目的を掲げて、市民図書館と名乗ったこの図書館が、わずか9年の間に8人も館長さんを代えてどうするんですか。今流行の言葉で言えば、一体、任命責任はどこにあるの。それを見逃してきた市民の責任はどうなるの。

図書館長というのは、職員の先頭に立って、市民にきちんと図書館サービスの機能を届ける、全うする。そういう責任がある。図書館長というのは、この建物の管理者でもない、火元取り締まり責任者でもない、図書館サービスの先頭に立って本当に市民が良かった、満足だったというサービスをしなくちゃいけないのです。それなのに、9年の間に8人も

の館長を代えてどうするんだと言いたい。

よそ者がここに来て何をしゃべるんだと言うかもしれないが、どうしても僕はしゃべらずにはいられない、これが1つ。

もう1つは、この図書館が誕生した時に、これまで石狩市の図書館作りを進める会というのがある、本当に頑張ってこられたけれども、会が、今度は図書館友の会として、再出発というか、衣替えをして出発しますと宣言したのに、9年経って、どうして友の会ができないんですか？と私はいいます。

市民は何をやっているのですか。いや、そんなこと申し上げちゃいけないかと思うんですけども、私、言わずにいられないです。今まで10何年もこの図書館とお付き合いしてきて、皆さんと会うのもこれが最後かと思いながら、またお呼びいただいて、もっと楽しい、もっと希望に満ちた話ができればと思うんだけど、どうして、この図書館にこんな不思議があるんだろうか言わずにはおられない。何か憑き物があるのかな。だとしたら、これから皆さんがあんたの言うことは全然違うよとおっしゃるならそれでいいけれども、ちょっとおかしいなと思ったら、この図書館のこれからのために、未来の子供達から預かっているこの図書館をしっかりと成長させて手渡すためには、市民として何かをしなくちゃいけないと分かっているほしいと思うのです。

館長さんの話は、また別にして、私、渡邊館長さんが国立国会図書館から見えられているという事をお聞きしておりましたから、国立国会図書館の職員の方がどうして石狩の市民図書館の館長さんに、と思っておりました。正直に言います。どんな方かしらと30分位お話ししましたかしら、私の心は変わりました。国立国会図書館から来てるから、なんてことはどうでもいい、本当にこの図書館の事を考えて、在任する日数は少なくとも、この図書館の明日のために何かをしなくては行けないと、そう考えておられることが私に伝わりました。

じゃあ館長さんの話は、過去のことは過去とこととして、これから、しっかりこの図書館を支えていく希望として、私達が受け取っていいと思えました。ですから、館長さんの話は、その不思議は、それまでにしまして、なぜ図書館友の会が生まれないのか。

アメリカに何度か行きましたけれども、どんな田舎の町に行っても、図書館があれば、そこに図書館の友達が友の会を作って、図書館のサポーターをなさっている。図書館の数だけあるんですけども、その全国組織を全米図書館友の会といいますけれども、その全米図書館友の会のための手引き、案内、資料集、そういう物を作っていましたので、手に入れて見ました。そこには、まず冒頭にこう言っている。「人生と同じように図書館にも友達が必要です」。友達って一体なんでしょう。

みなさんは、一人一人友達がいらっしゃる。友達って何だろうかと考えていただければ分かるんですけども、やっぱり、しっかり手を取り合える。時には、励ましあったり、忠告しあったり、つまり、しっかり向き合う関係の人、それを友達と言う。親しい友達、真相は色々でしょうけど、友達は何かと考え、じゃあ、図書館の友達とはいったい何かと。

本当なら図書館というのは、市民のみなさんそれぞれの物なんです。皆さんはこの図書館は何か、どっか役所が建てた建物で、それを使わせてもらっているなんてもんじゃないと思う。図書館は、私たち自身の物なんです。そう思うときに友達としての市民と図書館との関わりをどう有ったらいいか見えてくる。

アメリカのオレゴン州。太平洋岸のワシントン州、オレゴン州、カルフォニア州と続きますけれども、オレゴン州の田舎に行ったことがあります。この話はしたかもしれませんけれども、あらかじめ、あなたの図書館にこういうメンバーで行きたいので、ご都合どうですかという風に手紙を出すんです。そして、返事を貰ってから出かける。ある図書館では、最初はなにか返事が来ない。最初は10ヶ所くらい出したんだけど、返事を頂かない所には重ねて手紙を出します。なんと、本当にいらっしゃるかどうかと思ってお返事していませんでした。ある図書館では、手紙が紛れていまして失礼いたしました。もう1つの図書館からは、あなた方が来る途中にチロキンという図書館があるので、そこに寄ってから私の所へいらっしゃいという手紙がきました。きっと新しい図書館ができて、私達に見てほしいんだろうと喜んで行ったんです。そしたら、バスの運転手がいくら探しても、チロキンという図書館がないんです。本当の田舎の家が10軒・20軒しかないような所で、やっと見つけたのは、この建物より狭い、この部屋の半分位しかない古い木造の建物でした。そこにシティホールや市役所。これは、図書館にわざわざ寄って来なさいというような図書館かと思っていました。

館長さんが出迎えてくれて、今まで毎日開館していたんですけれども、財政が苦しくなって、1日おきの月、水、金、しかも、午後だけしか開いていないんです。今日は特別に皆様がいらっしゃるので午前から出てきました、とという話で、本当に失礼だけど、物置と言ってもいい建物でした。しかし、その村の600人が、週3日午後しか開かないけれども、そこに館長さんがいらっしゃる、出かけて本も借りるし、調べ物もできるし、つまり、大きなネットワークの中の1つの窓口という感じですけども、そこで、私達を出迎えてくれたのは館長さんだけじゃなかった。

中年の女性が3、4人いらっしゃって、さらに小さな子供がいました。館長さん曰く、うちの息子ですけど、日本人をまだ見たことが無く、ぜひ見たいと言うので、学校を休んで来たんです。女性の接待でお茶をいただき、お話を聞くと図書館友の会があって、私達は友の会のメンバーです。皆さんよくいらっしゃいました。色々話をしていると、この古い建物も図書館として開館するために、私たちが骨を折りました。このカーテンも私達がつけたんですよ。とても誇らしげに話をしてくれました。壁を見ると、友の会のメンバーになりましょうとアピールしてありました。人口600人の村の小さな図書館で、村の人達が私の図書館として、本当に誇りを持って私達に紹介してくれた。何か図書館の原点に出会った感じがいたしました。私の図書館友の会との出会いは、多分チロキン村の小さな図書館が最初だと思いますけれども、

昨年ちょっと思い立って、チロキンは、一体今どうなっているだろうと思って、インター

ネットで調べました。そうしたら、楽しい文化センターができて、その中に図書館が入っているという図書館のホームページが出てきたんです。もう20年、30年近く経っていましたがけれども手紙を出しました。こうこうこういう者ですけども、チロキン村の図書館はどうなっていますか。すると、丁寧な写真入の手紙が来て、なんと当時の館長さんが今、友の会の会長さんをなさっていて、日本人を見たことないと言ってお母さんと一緒に来ていた子供が、今図書館の司書をしているのです。私あの時のだれそれです。図書館というのはそういうキラキラした物ではない。もっと、俗って言っていい、私たちの日常の暮らしのレベルで考えたり、付き合ったりしていくそういうもの。友達という関係も、そういう風に何か立派な組織を作ったり、お金を集めたり、気楽に図書館と本当に友達として話し合いをできる。また、住民の中でお互いに良い関係を持ちながら、図書館と付き合い合っていく、そういう市民が私は求められているのだと思うんですよ。

伊万里は、図書館が誕生してから図書館作りを進める会を「図書館フレンズ伊万里」、皆さんお手になっていると思うけど、図書館雑誌の昨年の号に「図書館フレンズも市民図書館も13歳になりました」。図書館友の会だけが孝行だ、市民図書館が孝行だ、じゃない共にフレンズも図書館も共に13歳になりましたとこう言って、これまでの流れを振り返る事ができる、私は、伊万里だけはどうしても崩れてほしくない図書館であり、フレンズですけども、そんなに難しい話じゃないんです。本当に友達とは何かを考えれば、それぞれに道は通じると思う。お手元に差し上げた中に、あるべき友達をめざして、こういう風に書いて3つ挙げましたけれども、図書館を支えるということはどういうことか、それは簡単に言うと、喜びも悲しみも一緒にしようということです。図書館と一緒に喜び、図書館と一緒に悲しむことができる。問題があれば一緒に考える。それが友達。そんな難しいことじゃないんです。

市民は、全て図書館の友達、全て友達なんです。市民は、全て図書館のお客さん、こう言っても良い。その内、この図書館の本を借りたりするためにカードを貰っている。それは1つの約束ごとの為なんです。友達、あるいはお客さんは、全ての市民。図書館に来ている、来ていないに関わらない。私はそう思ってるんです。

ニセコという町がございます。あそブックという会があって、図書館は、あそブックというニックネームをつけてるんですけども、ニセコに丹羽さんと前回こちらに伺ったときに一緒に、色々お話聞いたりして、その時に図書館を運営しているのは、町の委託によってあそブックの会がやっている。その時に、あそブックの会が図書館の運営に責任を持っているけれども、あそブックの会の会員は、町民全てじゃないですか。その町民の内、きちんと動いていける人たちが会に集まって、図書館を運営しているけれども、つまり、ニセコ町の図書館は、町民全ての物で、運営するあそブックの会というのは、会員は町民全てですよとお話をしました。

何か選ばれた人達だけが図書館に責任を持つという訳じゃない。それは、あってはいけないと思うのです。

友の会も何か選ばれた市民の集まりとか、選ばれた市民が図書館を支えていくなんで無い。全ての市民が友の会の会員なんだけれども、具体的にサポーターとして動ける人が集まって組織を作る。これを踏み違えると、本物の図書館友の会にはならない。今の日本にも図書館が何千もあって、そのうち幾つかに友の会があったり、図書館を考える会があったり、図書館作りを進める。図書館を進める会だったり、色々あるけれども、本当の友の会というのは、さて5本の指を折れるかなと思うんです。友の会と名乗っているけれども、友の会もどきというのがある、もう1つは、友の会まぶし。友の会という粉がまぶしてある。もう1つは、これは絶滅危惧しているけれど、友の会フラージュというのもある。カモフラージュのフラージュ。友の会と言っているけれど、目的は別な所にあるとか、友の会モドキが1番多いです。一所懸命やっているけれども、本来の図書館の友達との関係から少しズレている。集まる人の個人的な趣味の色が出たり、化学反応を調べてみれば分かりますけれども、そんなことで本当の友の会は難しいけれども、実は簡単なんですね。

図書館友の会の養生訓を書いたんです。どうしても言わなくてはいけないことが一杯あるものだから、それは丹羽さんに差し上げた。

これは、自由無制限に複製することができます。小さいから、拡大して自由無制限の複製して使うなど、かなり利用していただけます。それでも、なかなか本物の友の会というのは難しい。みんな忙しい。一生懸命やっているより、図書館行って本を借りられて、調べるのだって自分で調べれば充分ですよ、という人が結構たくさんいますよ。そんな会なんか作って、メンバーになって、余計な義務を負うよりは、図書館のお客さんでいた方がいいよ。でも、そうすると、また不思議が起こる。少なくとも、今日ここに来てお話を聞きに来た市民の皆さまは、何人かの方には本物の友の会作りに指を立ててほしい。

随分前ですけども、根室に行ってお話した事があるんです。夜でしたけれども、お話が終わって帰ろうとした時に、国後、択捉で学校長をされて引き上げてきた方で、ちょっと名前は忘れましたが、元校長先生がここに出てこられて、今話を聞いて市民がじっとしては、本物の図書館にはならないと思うんで、何かをしようと思うから、是非、この指に止まってくださいと指を上げた。それから町に市民の集まりが出来て、今は根室図書館友の会として活動していますけれども、やっぱり誰かが指を立てなくてならない。1人でもいい、2人でもいい。触ってくれる人がいなければ、石狩市民図書館の未来はありませんよ。私はそう断言します。図書館は、いくら優れた館長さんがいて、優れた職員さんがいても、明日がどうなるか分からない。平和な存在、図書館を良くすることは、すごく難しいけれども、駄目にするのは全く簡単。あっという間に、見えないところまで落ちてしまう。それでいいとは思わない。この図書館が、見かけはピカピカしているかも知れないけれども、中身はどうなるか分からない。それは皆さん次第。そう申し上げたい。

そういうと、そんなことないよ。石狩だって友の会があるよって声が聞こえそうだけでも、私は、本物の話をしているんです。友の会もどきでもない、友の会まぶしでもない、友の会フラージュでもない、本物の図書館友の会を誕生させて、この石狩図書館が遥かな

未来に向かって希望を持つ事のできる図書館として成長して行ってほしい。その願い以外何物でもありません。お聞き苦しい点もあったでしょうけど、どうぞ、この年寄りに免じて、三代の天皇にお仕えしている、三代だよね、まあ冗談は別にして、私は、この石狩市民図書館を他人事には思っておりません。仮に再び来ることができなくても、また来たいですけども、来ることができなくても、私の心から離れることはないとお伝えして、お話を終わりにしましょう。ありがとうございました。

【第2章】 何でも話そう！図書館のこと（グループ茶談会） - 発表 -

C班

（1）良い点

利用者を市民に限定していない所、貸し出し冊数に制限がない所、この辺に高評価が何点かでている。図書館に絵本がたくさんある、通常ポスターに関らず、チラシだとか、視聴覚資料だとかそういった物があるのが良い。閲覧スペースが非常に多く明るいし席も沢山ある所良い点と出ています。

（2）もっと良くなるには

もっと良くなるにはということが出ていたのは、司書の方がもっと子どもに身近な存在として、例えば、フロアをウロウロしてくれているだとか、本が大概の物は見つかる充実しているという意見があった反面、専門書とか結構ない物があるので、そういうのがあったらいいなという意見が出ておりました。

（3）その他

先ほど先生から話があった友の会とボランティアの違いが良く分からない。今ボランティアとして、関わりあっている中で、そういう関わり方が非常に気も楽だし、自由な感じでいいのだけれども、友の会とどう違うだろうという感じでいまして、そういう点で結論が出た訳じゃないんですけども、会話がされました。

B班

（1）良い点

職員が明るく声かけをしてくれる所、ボランティアさんも頑張っている。建物が立派、明るくて、書架の高さも低くて本が取りやすい。自動貸出機は、借りる時に気楽で良い。本が綺麗に並んでいる。駐車場が広くて沢山車が止められていい。

（2）もっと良くなるために

友の会がなぜ定着していないのだろうかという所で、石狩に住んでる方は、働き場所が札幌なので、ベットタウンとして目線が札幌に向いてらっしゃるで、石狩市民という自覚が薄いじゃないかなという意見。行政に頼らないお金の生み出し方が出来ればという意見

がありました。

(3) その他

図書の使い方や予算の使い方とか等、友の会ができれば、ボランティアさんのコーディネートするのか？という意見がちょっと出ました。

A班

(1) 良い点

今、皆さまが言って、発表にあったようなことです。弁当が食べられていいね。滞在型でゆったりできることであるということとか、最初は新しく綺麗過ぎるかなというイメージだったけれども、だんだんと温かみを感じるようになっていたと言っていただけで、それは、きっと喫茶で地場のモノを扱い始めたり、館内で飲み物をOKにしてみたり、色々な改善をしてくる中で、良くなってきているんじゃないかなというご意見も頂きました。それとは別に、これは一般的な図書館との関わりの中で、見たかった本を探し出してもらえた事で、図書館に対してとても好感というか良かったなと、それがきっかけになりましたよと意見もいただきました。

(2) もっと良くなるために

2番目のこうすればもっと良くなるなんですけれど。ここのグループには最年少19歳の方がおられまして、ここに来るのはなかなか参加しづらい。ここだけじゃなくて、講座でも同様で、それには年齢的なハードルを感じるということが1つと、内輪の感じがしてしまうので、なかなか入りづらいんじゃないかなと意見がありました。それについては内容のPRの仕方を考えてみたり色々考えられるので、非常に参考になる意見だと思いました。後は、札幌よりすごく自慢できる図書館だよという言葉を受けて、もっと自慢した方がよいと言って頂いたのですけれども、これについては、常日頃市外にはとっても評判が良いんだけど、課題は市内だなと思っていたのです。市内だと比較対象が無いので、そんなにあらたまって言うことにもならないじゃないのかと言っていたので、ちょっと安堵した所があります。

さきほど菅原先生からお話のありました「図書館を育てていく」という所をもっと意識的に考えた方がよいんじゃないか、協働ということも謳われていますけれども、それを良い様に使われるのではなくて、きちんと考えて図書館を育てていく必要があるのではとの意見もいただきました。

2番目、予算的なもので資料費削減という事もありまして、きちんと図書館を支えていくためには、予算もちゃんとしていかなくてはいけないんじゃないかのご意見も頂きました。

(3) その他

まず1点は、高齢者に対するサービス、足のない方に対してどうゆう風に運んでいったらいいとか、もっと配慮して欲しい。次にPRが足りない。例えば、色々なサービスを

やっているけど、それがなかなか伝わっていない所があるので、もっとPRをしていった方がいいということ。次に、行政内部に対する理解をもっと進めていく必要がある。これは、行政職員として内部への訴えかけというのは難しいものがあるので、そこにこそ市民の方が声を上げていける、その方が伝わると言っていました。問題を隠すのではなく、問題点を開示することが、そういう時大切なんだよとご意見をいただきました。

図書館は借りる所だけではなく、色々なサービスをやっていることなのですけれども、これを実際にPRする事で、図書館に遊びに来てくれるような感覚で、もっと人が集ってくればいいね、とお話をしました。それと、若いメンバーのご意見なんですけれども、HPで司書の一言、今日はこんな事があって疲れたとか、そういう何気ない言葉がアップされていると面白いなとご意見をいただきました。以上です。

D班

(1) 良い点

貸し出し冊数の制限が無くて良い。自動貸出機があるので待ち時間がなくて、スムーズに借りられてすごく良い。子どもの本の制限がないということで、子供は、何冊も借りたがるし、読みたい本もたくさんあるのですごく利用しやすくていいという意見です。それと、予約して借りているが、札幌市の屯田の方が、札幌市はなかなか予約が取れなく、石狩の場合は、今何人待ちとかきちんと表示されているので、基本的にはそんなに遅くならずに予約の日にちがきちんと計算どおりなっていてすごく良いという意見です。

図書館の施設の利用という事で、利用として施設の展示等ですね。そういった目的で展示スペースを利用させていただいて、利用の希望日に借りられない部分もありますけれども、調整して色々利用しやすい形で利用させて頂いているので、良いという事です。

(2) もっと良くなるために

市民図書館で図書館まつりをやっていて、運営委員会を作り市民の意見をもらっていますが、さらに幅広く事意見を聞ければ、もっと良くなるんでないかという意見がありました。

(3) その他

先ほども出ていましたが、友の会とボランティアの違いがはっきり分からないので、できれば、その辺の説明をしていただければということでした。また、冊数制限が無いので、返却台にきちんと返していないので、背表紙がきちんと整理してもらうようマナーの啓発をしてほしい。こどもコーナー、赤いたまごで読み聞かせやその他イベントをしていますが、せっかく石狩市民図書館のこの場所(おそらくホワイエの外)の環境がいいので、夏などの天気の良い日は、外の芝生で読み聞かせをする等、外でもできる行事やこの良い場所のできる行事を考えてやっていただきたいです。

菅原先生からの感想(講評)

今お話を聞いていて、この図書館に対する評価というか、皆さんが日頃感じておられる事が、それはかなり点数が高いですね。本が揃っているということは、職員も良いので、それは、さらに発展させていくでしょう。その中で一番大事なのは、職員の資質。

例えば、子どものサービスは、だれでも交代でできることじゃないんですね。私の聞いたところでは、本当に子どもに関したサービスをするには、子供のための本を 800 冊から 1,000 冊読んでいることが最低の条件だと聞いていて、なるほど、そうだと思うんです。

司書って一体なんですか。図書館で図書館サービスのためにしっかりした仕事をする司書？ 司書というのは、家に帰ってから勉強する人のことです。司書というのは、日本で朝から晩まで仕事してるだけが司書じゃないんです。つまり、自分で充電しなければ当然できないわけです。その点で、皆さんの評価は一定程度高いんですけども、さらに図書館の内側の課題としてそういうことがあります。

それから、ボランティアの名詞が出てきていますね。今、ボランティアのネームカードを下げている方何人かが、今日お茶のサービス等をして下さいました。ボランティアというのは、それぞれが持っている能力と時間を、無償で図書館のために提供する。それがボランティアなのです。図書館の中には、有償ボランティアとかお金を払う有償ボランティア。この有償ボランティアというのは、どんな強力な接着剤を持っても絶対くっつかない。有償ではないからボランティアで、図書館としてはちょっと恥ずかしいことも世の中にはありますけれども、ボランティアというのは、自分の持つる体力と時間を無償で提供するという定義を踏み外さないようにしなくっちゃ。

友の会って何だろうという話がありました。ここ（ホワイトボード）に縦糸と横糸を書きましたが、縦糸は、図書館の人たちのサービス。縦糸で糸がちょっと弱っているなどが、ここ 1 本なんか抜けているなという所をボランティアが補ったりする。図書館の職員を助けるボランティアも縦糸なのです。そして、縦糸だけでは織物にならない。横糸、これが友達としての市民。両方がしっかりしないと、これぞと思う石狩市民図書館は完成しない。今は、縦糸は評価されているけど、それだけじゃいけないから、皆さんが今度から横糸を紡がなくてはいけないと思います。

それから、子どもへのサービスの話を私の座っている所で幾つか出ていたと思うのですが、けれども、図書館が一番力を入れなくてはいけないのは、子どもへのサービス、生涯を通じて本と良い友達になれるように、子ども達に素晴らしい本の世界を手渡すこの仕事に、どんなに力を入れても入れすぎることは無い。

それはもう、40 年も、極端にいうと戦前から言われてきたことですがけれども、まあ、ある時には、子どもは孤独だと図書館の出入り口も子供は別に作ってみたり、ポストの数だけ図書館はというのは、子ども達のために言っているんだけど、十分に理解されない、十分に広まらない。そういう風にして今がありますから、これをもう 50 年前から本当に徹底して、大体子どもサービスをという事はと何か、ということをもう一度考えていく必要があったらと私は思っているんです。

そして、その子ども達がやがて、この石狩にあるいはもっと広くこの国を支えるようになるれば、素晴らしい図書館の国になることは間違いない。今社会の主な所にいる人達は、図書館のことを知らない。知らないっていうことは、頭で知らないじゃなくて、体で知らないのです。自分が図書館というモノを通過していない。図書館を知るということは、知識として図書館を知ることじゃない。本がいっぱい出ていますけれど、それを読んだって図書館の事は分からない。図書館へ実際に足を運んで、使って、そういう経験を自分たちでするけれども、それよりもっと大事な子ども達にそういう経験、子ども達に図書館というものを体で通過させるように、これはいくら骨を折ったって悪いことは無いと思います。10年、20年、30年、50年やりましょうね。今日は、どういうことか子どものサービスデスクに誰も座っていなかったけれども。子どもが1人でもいたらね、あそこに児童司書がいなければ私はそう思っています。その位大事ですね。まず配置するのは、子どもカウンター、次に調査や相談の所、その次に貸出デスクに司書が着く。あそこは、対面でコンピューター貸出しているだけなんだから、むしろ、お客さんと司書が目と目を合わせる場所、ただ、下向いて一生懸命コンピューターやってたって、これからもできる点がたくさんあると思います。

図書館の館長さんをはじめ、皆さんいらっしゃるから、市民の皆さまに知っておいてほしいのですけれども、図書館職員がしっかり充電できる様、ハードもソフトも図書館としてきちんとやっていけるか、図書館の明日に関係すると思うんです。それくらい職員というのは皆さんがいらっしゃって、ただお給料を貰って働いてるという人は一人もいないと思うんですけれども、同じ石狩市の職員の中で、図書館ほど働きがいのある職場は無いですから、毎日、大勢の市民と顔を合わせ、会話をし、子ども達と手をとって、こんな幸せな職場は無いんですから、それを今度、市民の皆さま方が職員をしっかりサポートする。それが友の会なんです。職員を励まし、一緒に勉強することもいいでしょう。職員と市民と一緒に勉強するチャンスなんて、もっともっと作れると思うんです。そうする事によって、更なる発展が期待される。

2階の地域資料コーナーに図書館に来たら、まず、ぐるっと回っていますが、前回と今回の資料の充実度が全く違っていました。丹羽さんが案内してくれたんだけど、道内であれ位資料が揃っているところは無いでしょう。あれを大事にを使って、本物の友の会が欲しいけれども。もう1つ市民にやってほしいこと、或いは、やらなくてはいけないのは、この石狩の市民の手による図書館物語を紡ぐ。石狩にどの様にして人が住み、生活する様になったか。その頃から図書館の歴史が始まっているんです。

確かに設置条例は立派だけれども、この設置条例ができた時から石狩図書館の歴史が始まっているんじゃない。もっともっと遡って、石狩市民図書館物語を市民の手で作っていく、それがひょっとすると、友の会の誕生と結びつくかもしれません。いきなり友の会を作るのが難しければ、何人かで、或いは読書、本と人々のつながりから掘り起してみましよう。仲間が出来たら、それはそれで図書館物語を掴む事になるんです。

このマチの図書館の石狩市史とか石狩郷土。あれはですね、役所の歴史なのです。2階に行くと、いっぱい並んでいるんです。全道の、私は八雲町なんですけれども、八雲町史を見ると、役所の記録を整理しただけで、本当にそこで生まれ暮らし、死んでいった人の人々の記憶というものが、全然こういう場所に入っていない。これはね、図書館のサービスというか、図書館の歩み、図書館がそれをしなければ誰もできない。このマチに息づいた人達の記憶を紡いでいく仕事は、市民と図書館が一緒にならなければならないです。ぜひ、これをやってほしい。おしまいに、それだけを申し上げて。有り難うございます。

菅原先生への質疑

A：図書館の蔵書は、単なる物品なのか。私はそうでなくて、市民の共有財産と考えているんですが。

菅原先生：ピタリそうです。図書館そのものが、建物も職員も中に詰まっている資料も、全部市民の財産なんです。誰のものでもない、あなた方自身のこれが図書館を考えていく基本です。おっしゃる通りです。

B：自分は札幌市北区の住民なんですけれども、この図書館を利用させていただいております。石狩の図書館の場合、私ども札幌市民の利用者が非常に多いんですけれども、多いといっても、かなり多い比率になっているんですけれども、現状を図書館の方から話していただいて、それについて、どう考えたらいいのか。

副館長：ここに数字は持ってきていないので、大体の事しかお話できませんけれども、全館を通して、市民と市外利用の割合が半々になっております。登録者数からいくと50%強が石狩市民で、札幌市の市民の方が4割をかなり超えております。それ以外の自治体の方が、何%かになっております。利用者数は若干比率が違いますけれども、大体そのような比率になっております。

A：ちょっと補足させてもらっていいですか。H18年の記録ですけれども、個人貸出登録で石狩市民が54%です。札幌市が46%です。貸出は、本館で石狩市民は45%、札幌市民が54%ですね。平成18年から23年までの推定をしてみたんですけれども、石狩市民の23年の石狩市民の登録数は2万5,200人で、大体46%ですね。札幌市他が2万9,600人で大体54%になるんです。

副館長：23年度の推定ですので、大まかにでは分からないんですが、全体を通して大体半々になってきているのは事実です。先生その当り何か一言ありましたらお願いします。

先生：そういう現実をどう考えるかということは、1つは、石狩市民以外の利用を認めていくことが、一体どうなのかということですね。図書館のある町と無い町で現状は違いますでしょう。無い所の方が石狩市民図書館を使うというと、自分の町にどうして図書館を作らせないのかはどうしてかと。これも正論ですが、お話の根本は、日本の図書館の「いびつ」な状況の現れなのです。札幌は190万人になって、今のような図書館状況、言葉悪いけど体たらくですよ。そのシワ寄せが石狩市民図書館に来ているということもあ

るんですよ。今日館長さんと話したのだけれども、北海道全体としても考えても、まだ図書館のない市町村が45%。合併後の数でもそう。それをどうしていくかという大問題を話したけれど、そこまでいなくても自分たちの図書館を持つ。当別なら当別に図書館を持つこと、持たせることが大事。その上で、どこに住んでいても私の図書館として使える。ライブラリーシステムと呼ぶんだけど、私は、今の利用のさせ方を続けていって良いと思うんだけど、その先には、札幌がこのままでは駄目じゃないかと声が皆さんからも出て、札幌市民からもっと出なくちゃいけないですね。札幌市民を200万人として、100のまともな図書館といわないまでも、図書館が札幌市に100館無ければ、札幌市に図書館があるとは言えないです。今いくつか知らないけど、ある程度のレベルと高い政治判断も必要なんです。

今の図書館の件と同じですが、滋賀県八日市が、周辺の図書館のない町の住民の利用がすごく多い。その時に、なぜ図書館の無いところに住民の税金で八日市の図書館を使わせているんだと、そういう声がすごく強かったです。でも館長は、周辺の市や町の住民が八日市の図書館を利用することによって、自分の町にどうしても図書館が必要だとの自覚が生まれてくる。それまでは、八日市が中心の市として責任があると図書館長が言ったのです。その通りになったんです。今、八日市は、東大見市という大きな市になったけれども、その合併前でも、1つ、2つの例外を除いて、全ての町・村に図書館が誕生したんです。それには時間が掛かった。20年も、もっと掛かった。今日本の図書館の状況はそういう所にある。

今のお話で、私は、少し高いレベルの判断で、札幌市民の利用も周辺の市町村他の利用もきちんと答えていたら良いと思います。まあ、中途半端で申し訳ないんですけども。

副館長：今先生がおっしゃいましたが、札幌市の中でも、札幌市の職員達と話していると、石狩市図書館を札幌市の市民が利用するというので、札幌の図書館行政があふれ出されていると言っております。

例えば、篠路地区、あいの里地区は、本当に図書館行政から漏れた地域があると分かってきて、札幌市の中でも、市長周辺や幹部にまで、そういうことが起こっているんだという声が挙がっていると聞いております。そういう意味では、10年、20年経った時に石狩市民も利用できるすごい図書館が出来た時、もっともっと便利な図書館が世の中にできるのかなと期待しております。